

書評

榎本英樹編

『排外主義の国際比較——先進諸国における外国人移民の実態』

(ミネルヴァ書房、2018年)

和泉 悠

わたしが第一義的に強調したい本書の両面的な価値とは、本書はわれわれに排外主義の国際比較をさせるといことである。著者らが排外主義の国際比較を行い、その考察結果を読者に分け与えてくれるわけではない。本書は国際比較の材料を与えてくれるにとどまる。本書は国家間の対比を示すが、どのような対比があるのか囁んで含めて教えてはくれない。本書が強くなるがすのは、本書を手取る市民が国際比較を実際に行い、掲げられる究極的な目標——排外主義の緩和および解消——を達成するために公共的に議論を深めていくことなのだ。

以下では次の順番で本書を議論する。まず本書の概要を簡単に述べた後、とくに哲学者・倫理学者の観点から本書の賞賛されるべき特徴と有用性を指摘する。次に、期待を込めた批判的論点を列挙する。そこで指摘される課題の多くは、わたし自身や本稿の読者こそ取り組むべきものである。

本書の概要

本書のトピックはエスニック排外主義であり、それは次のように広く定義される。

- (1) エスニック排外主義とは、個人、集団、制度といった主体が、ある客体を移民・外国人などを含意しうるエスニシティ、人種、国籍、ネーション、宗教といった属性を根拠として、尊厳を貶めるなど否定的に評価したり、諸機会および諸権利の享受を妨げたりする態度・状態・および実践である。(pp.7-8)

たとえば、フランスにおいてマジョリティである白人住民が、マイノリティのアルジェリア系住民に対して、団地への入居拒否を行うようなこと

(p.40) には、この定義が明らかにあてはまるだろう。本書の中で中心的に取り扱われるのは、「各社会における排外主義の特徴は何か」(p.5) という問いである。その他にも、そもそも排外主義とはなにか、それはどのように引き起こされるのか、そしてそれはどのように緩和および解決されるのか、という問いも提示されそれぞれある程度検討される。

各社会における排外主義の特徴を描き出すために、本書は大きく第I部「『西洋型』排外主義の多様性」(第1章から第6章まで)と第II部「アジア型排外主義の展開か」(第7章から第9章まで)に分かれ、各章がそれぞれフランス・英国・ドイツ・イタリア・(主に)北欧諸国・アメリカ(第I部)、そして日本・韓国・日本(第II部)をとりあげ議論する。時代区分を述べると、検討される排外主義的現象はどれも現在進行形のそれであり、歴史的な事項は現在に至るまでの過程や背景的知識として紹介される。またこれに導入部と結論部(榎本英樹「序章 外国人移民と排外主義」、終章 エスニック排外主義の解決をめざして)が加えられ、各章のハイライトや全体を貫くテーマの解説および今後の課題などが述べられる。

序章・終章でも指摘される通り(p.4, p.304)、各章の著者らが用いる方法論および概念・用語、そして記述のスタイルは大きく異なっている。北欧諸国を議論する第5章(永吉希久子「福祉国家は排外主義を乗り越えるか——福祉愛国主義と社会保障制度」)と第9章(田辺俊介「現代日本社会における排外主義の現状——計量分析による整理と規定要因の検討」)は、計量的なアプローチによって排外主義と多様な要因との相関関係を検討する。それ以外の各章はすべて非計量的なアプローチを用い排外主義の特徴やその原因を考察する。たとえば、第1章(森千香子「カラー・プラインドの建前とカラー・コンシャスの実態——在仏ムスリムが直面するレイシズムの特殊性」)においてはドキュメンタリー映画での「語り」が引用され、第7章(明戸隆浩「現代日本の排外主義と『対抗言説』——『ナショナリズム』から『ヘイトスピーチ』へ」)では雑誌なども含む出版物の言説に焦点が当てられる。それぞれの著者が指

摘する各社会での排外主義の特徴と考察は非常に多岐にわたるため、紙面の都合から本稿で網羅的に紹介はしない。以下の議論の中でいくつか具体的に言及する。

本書の優れた側面

必ずしも社会学や政治学に詳しくない哲学者・倫理学者の観点から見ると（あるいは類比的な言語学者や心理学者などにとってもそうかもしれない）、本書の実践的な有用性は際立っている。本書一冊で、行動科学における排外主義研究の多くを見渡すことができ、多様な視点と豊かなリソースを得ることができる。単純な例として、たとえば第1章と第2章（榎本英樹「多文化主義は死んだのか——英国における排外主義の展開」）を並べて読むと、仏・英の明らかな違いが立ち上がる。一言で「多文化主義」といっても、フランスではそれがフランス共和主義と相反する危険な思想として、英国では社会統合を維持するための社会規範として理解されるのだ。他にも、英米哲学の文脈で研究を行うわたしは、英国や北米の実情について比較的馴染みがあったとしても、独・仏・伊・北欧および韓国における排外主義の実情についてまるで無知であり、本書の解説がとても有用である。たとえば、第8章（高鮮徹「韓国の排外主義とその抵抗の試み」）では、在日コリアンである「在日同胞」（p.237）への制度的差別などが説明される。あるいは、第4章（秦泉寺友紀「イスラムはなぜ問題化されるのか——イタリアの排外主義の現状」）では、イタリアにおける宗教的多様性を担保するための「協約」システムと、その機能不全が議論される。こうした各地域を専門とする社会学者の知識量に助けられ、読者は考える材料が与えられる。たとえば前者について、「民族」（そのようなものがあるとして）的ルーツや文化などを同じくする客体への排外主義的現象は、いかにして理解されるのだろうか。

多様性の側面は、異なるアプローチ・方法論が共存している点についても同じことがいえる。たとえば第9章は日本全国で行った大規模な社会調査データを用い、年齢・性別や「あなたは日本の伝統文化をどの程度誇りに思いますか」といった

質問群から抽出される個人の様々な属性と、排外主義的な傾向との相関関係を分析する。ひとつの興味深い結果は、「日本では自分の国の伝統やポップカルチャー、スポーツに誇りを感じている人の方が（愛国心など他の意識の影響を除いた上では）どちらかといえば排外主義的ではない」（p.279）というものである。概念分析や思想史的考察からこの結果を洞察するのは困難ではないだろうか。改元やオリンピックにまつわる騒動など近年の全体主義的事象の乱発に絶望を感じている人は多いと思うが、そこにも排外主義を抑制するようななにかが隠れている可能性があるのだ。また本書は同時に概念分析や思想史的考察の重要性を再認させる。たとえば、第1章では排外主義の主体・客体双方の語りにもとづき、現代フランスにおけるレイシズムの形態が鋭く分析される。著者の森は、差別的現状への批判が「人種など存在しない・見えない」という建前を利用して退けられる一方、実際は人種を喚起するメタファーが多用され、マイノリティがより深く疎外されていることを明らかにする。

もうひとつ指摘しておきたい側面は、本書では排外主義の解消方法が明示的に議論され、それに向けた少なくともスケッチが提示されることである。たとえば、第7章では、著者の明戸が現代日本の排外主義的言説が90年代よりどのように展開されてきたのか検討すると同時に、それらへの「対抗言論」がどのようなものであったのか概念的に整理する。排外主義的言説を食い止めるためには、今後なにに「対抗」すべきなのか、どの誤謬を追求すべきなのか、そういった問いを考えるために必要な作業である。また、終章では、各章の考察を踏まえて、いくつかの示唆が与えられる。たとえば、「あるタイプのナショナル・アイデンティティやナショナリズムが外国人移民に対する排除を生み出す傾向が大きいと認識することが重要である」（p.303）と一般化し、日本を例として考えると、国旗・国歌の称揚や戦後教育否定などを具体的には見直す必要があると指摘する。実践的課題を注視し続けることは、われわれにとって重要であろう。

批判的論点

以下では比較的順不同に論点をあげ、本書を批判的に検討する。当然ながら、批判的論点の存在は本書の価値を高めるばかりである。われわれがこれらの課題に取り組んでいくべきだろう。

第一に、本書で「国際比較」が行われるのは終章の数ページにとどまるため、数多くの問いが投げ出されたまま残っている。これは読者に対する挑戦と解釈してもよいかもしい。いくつか紙面から叫び声をあげる問いを取り出してみる。

レイシズム概念は排外主義を理解するために必須のものであるが、本書の各章でどのような概念が想定されているのか、または調査の指標がどのようなレイシズムを取り出しているのか（あるいは取り出していないのか）定かではない。第1章において議論される現代フランスにおけるレイシズムは、文化的レイシズム（いわゆる「新しい」、「現代的」レイシズム）の一形態の「普遍主義レイシズム」（p.26）とされる。第3章（「なぜ「イスラム化」に反対するのか——ドイツにおける排外主義の論理と心理」）でも、現代ドイツにおいて広がる、民主主義や平等概念を掲げたイスラム批判が解説される（pp.94-97）。これらは一見まったく同種のレイシズムであるように思えるが、果たして本当にそうなのだろうか。そして、もし同種ならばその原因も同じなのだろうか。ならば緩和方法も同じとなるのだろうか。第9章の日本を対象にする調査では、社会心理学者の高史明（2015, Ch.3）が行うような詳細な形でレイシズムを測定していない。高のように、もし古典的レイシズムと現代的レイシズム（第1章の「科学的レイシズム」と「文化的レイシズム」に対応）を分ける形で調査を行うと、たとえば在日コリアンに対するレイシズムが仏・独におけるレイシズムと異なることが判明するだろうか。仏・独・日の差異と固有性を踏まえてこれらの問いに取り組めば、終章での提案をさらに洗練させることができるだろう。

関連して、第3章は経済や社会保障の観点からも排外主義を検討し、公共的資源の分配に関する不正感——「割りを食っている」（p.115）——という認知が排外主義を勢いづけていると指摘す

る。ではこの要素はフランスにおいて同等の役割を果たすのだろうか。また、第5章では福祉制度についての計量的分析が与えられ、独・仏と北欧諸国の制度と排外主義的傾向を比較することができる。与えられるデータ分布（p.162, p.164）を見る限りでは、福祉制度に関して独・仏は似通っており、北欧諸国よりも比較的移民に厳しく接しているように思われる。これらの異同の含意はどのようなものだろうか。

さらに関連して、分配に関する不正感は、第7章で議論されている、いわゆる「在日特権」のプロパガンダが飼料を与えるところの意識とまったく並行的であるように思われるが、そうなのだろうか。第4章では、イタリアの排外主義が、カトリックとしてのナショナル・アイデンティティの揺らぎに起因すると指摘する。つまり、イタリア固有の事情が大きく影響しているとする。すると、イタリアの排外主義と他を比べれば、原因も帰結も含めて排外主義的現象の同質な部分——ある意味「普遍的」な部分——とそうでない部分を区別することができるのではないだろうか。同様の視点は、「先住民の征服や黒人の奴隷制を歴史的起源とするアメリカ人種主義体制」（p.179）を持つアメリカとの比較を通じても獲得できるかもしれない（第6章 南川文里「『移民の国』のネイティヴィズム——アメリカ排外主義と国境管理」）。本書はこうした「国際比較」の課題を終わりに示唆しているように思われる。これらにわれわれが集合的に取り組むべきだろう。

第二に、より哲学者・倫理学者向けの課題として、そもそも排外主義とはなにか、そしてそのながどうして悪いのか、という点に関する概念的な整理が必要である。前述のような国際比較を行うためには、用語を統一するだけでなく、語がおおよそどのような現象を指示しているのか明確化することが前提となるだろう。(1)の定義から分かるように、本書は「排外主義」を広く設定して、できるだけ多くの現象をとりあげようとする。しかし道徳的非難や、法整備の観点から考えると、「排外主義」が具体的になにを指し、それらがどうして悪いのか明らかにしなければならない。たとえば、何者かに「否定的」な「態度」を持つこ

とそれ自体を非難することも違法とすることもできないだろう。第9章の調査は、具体的な質問により、個人の属性として排外主義的な傾向を測定している。それらの個人的態度と「差別的政策形成・立法行為」(p.7, 表序-1)は少なくとも異なったレベルの存在者であり、それらをどのようにまとめて「排外主義」とみなし、非難できるだろうか。差別論(Hellman 2008など)との関連や、具体的な法整備を要請する根拠(明戸 2019など)を踏まえた考察が有用かもしれない。

第三に、まさに重箱の隅をつつくような論点だが、哲学者・言語学者にとっては重要な言語の選択について述べたい。第6章はトランプ大統領の発言を(2)のように引用する。その原文は(3)である。

(2) (前略) メキシコがアメリカへ送ってくるのは、最良の人々ではない。そうだ。彼らが送る人々といえば、問題を抱えた奴らばかりだ。奴らは私達に問題を持ち込む。麻薬を持ち込む。犯罪を持ち込む。強姦犯だっている。(p.177)

(3) When Mexico sends its people, they're not sending their best. (中略) They're sending people that have lots of problems, and they're bringing those problems with us. They're bringing drugs. They're bringing crime. They're rapists.

(<https://www.washingtonpost.com/news/post-politics/wp/2015/06/16/full-text-donald-trump-announces-a-presidential-bid/>最終アクセス 2019年5月6日)

(2)に本来の問題があるわけではないが、(3)と比較するといくつか興味深い差異が浮かび上がる。第一に、(2)の代名詞“they”が、(3)においては「奴ら」と侮蔑的な呼称を用いて表されている。これはトランプが伝える侮蔑的ニュアンスを表すために適切だろう。しかし同時に、トランプは元来中立的な代名詞を使っているだけだ(あるいはそういう言い訳が可能だ)、という点も強調されなくてはならない。元来侮蔑的な「奴ら」と

いうような表現を使ったわけではないのである(あるいはそういう言い訳が可能となる)。

第二に、引用部分最後“*They're rapists.*”という文が「強姦犯だっている」と存在量化文として言い換えられている。移民の強姦犯が数多く存在するはずがないので、これも解釈として適切だろう。しかし、トランプは「少なくともひとりそういう人物がいる」という存在量化文を使ったわけではなかったのだ。ここでの「複数代名詞+述語」という組み合わせは、いわゆる総称文として解釈される(和泉 2018)。日本語では「AはBだ」という文型がそれに対応する。つまり、「象は鼻が長い」といった文章のことである。総称文には量化の内容を明示化しないという特徴がある。すなわち「移民は麻薬を持ち込む」と発話しても、それが「象は鼻が長い」のように大多数がそうなのか、「蚊はマラリアを媒介する」のように99.9%そうでないのか、明示化されないのである(同じ文型は定義を述べるためにも使われるため、本当はもっと曖昧である)。「蚊はマラリアを媒介する」は、おそらくごくごく少数の事例さえあれば検証されたときとみなされるだろう。同様に、「移民は麻薬を持ち込む」も数例そのような事件があれば検証されたときとみなされるかもしれない。しかし、その発話は「象は鼻が長い」のように、あたかも大多数がそうであるかのように解釈されるのである。トランプはその曖昧さを利用しているのだ。大多数の移民は麻薬を持ち込まないが、それによりトランプは嘘をついたことにはならない。同様に、性犯罪に関しても、ひとつでもそのような事件があれば、“*They're rapists.*”という発言が、ミスリーディングだが間違いではなくなる(と言い訳できる)。著者である南川はより理性的に存在量化文を使用したのが、トランプはそうは言っていないのである。まとめると、ここでの排外主義的メッセージはより隠微そして陰湿と言い換えてもいいかもしれない。

以上のような論点は、排外主義的言説を分析する際非常に重要である。その点は、第1章の森論文におけるメタファーの分析からも明らかだろう。さらに、どのような質問を設定して指標を作成するのか、という調査に関しても重要となるだ

ろう。第9章で紹介される調査では、「愛国心」の指標を測る質問項目に「日本人であることに誇りを感じる」というものが含まれる。一方、「ナショナル・プライド」の指標のためにも「あなたは、以下にあげることを、どの程度誇りに思いますか」という問いが使われ、「誇りを感じる」、「誇りに思う」というほぼ同一の句が使われている。著者の田辺は「愛国心と市民・政治的プライドの間の相関係数は0.5を超え」（p.279）と述べるが、それは質問項目の設定に由来するのではないだろうか。わたしは基本的な事実誤認をしているだろうか。いずれにせよ、細かな語句への執着が、排外主義的現象を見つけ出す際に必要となるだろう。哲学者・言語学者がこの点で協力できないはずがない。

最後の論点は性差別に関わる。本書中でも指摘される通り（p.8, p.304）、本書は「エスニック」排外主義に焦点を当てるため、性差別や障害者差別などの議論が基本的には含まれていない。これはもちろん今後の課題であり、また本書での考察を生かしてあるいは「比較」して、別の種類の排外主義を議論することも可能だろう。ただここで指摘しておきたいのは、性差別と父権主義的社会の維持が排外主義と概念的にも実践的にも密接に関わり合い、切り離すことができないかもしれない、という点である（明戸が第7章で関連する引用を行っている p.224）。もしそうだとすると、性差別の問題は今後の課題ではなく、排外主義を理解するために向き合わなければならないものとなる。哲学者 Jason Stanley (2018) は、ファシズムにはいくつかの要素があり、それらが相互に依存・強化し合うことによってファシスト政治が実現すると主張する。それらの要素には父権的神話や、プロパガンダ、反知性主義、マイノリティ排斥、性差別などが含まれる。これらはどれも依存し合うと Stanley は主張するが、排外主義的現象に焦点を当てると、たとえば排外主義的感情を扇動するプロパガンダとして、純潔および女性・子供を守るという男性の社会的役割が失われる、というものがあがる。これは男性の性的不安を喚起し、父権的伝統・秩序が崩れると言いつらすものである。排外主義者が移民について語るとき、単に治安・

犯罪一般だけではなく、「性」犯罪に言及するのだ。トランプが「強姦」ということばを用いたのは偶然ではないだろう。本書で議論される各地域の排外主義と性差別はどのように関連しているだろうか。これからの研究の展開を期待したい。

参考文献

- 明戸隆浩 (2019) 「『自由の侵害の不平等』を是正するために——2018年入管法改定から差別禁止法の必要性をあらためて考える」、現代思想 vol.47-5, pp.73-82.
- 和泉悠 (2018) 「総称文とセクシャルハラスメント」、『哲学』 vol.69, pp.32-43.
- Hellman, D. (2008) *When is Discrimination Wrong?* Cambridge, MA: Harvard University Press. [池田喬・堀田義太郎 (訳) (2018) 『差別はいつ悪質になるのか』、法政大学出版局]
- Stanley, J. (2018) *How Fascism Works: The Politics of Us and Them*, New York: Random House.
- 高史明 (2015) 『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』、勁草書房.

本稿執筆は、2019年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2 および JSPS 科研費 18K12194 からの支援を受けた。